

特集「対麻痺のリハビリテーション」 によせて

横浜市大教授 土 屋 弘 吉

リハビリテーションの中で三つの大きな柱を挙げるとすれば、それは対麻痺、片麻痺、および切断であると言えよう。そのうちでも対麻痺のリハビリテーションは、近代的リハビリテーションの発祥と共に始まり、その発展と共に歩んで来たという点で、リハビリテーションのあらゆる面を包含し、現在では一応完成された体系を持つに至っている。

従って対麻痺のリハビリテーションにおける基本的な原則や方法論はすでに多くの成書に記載されており、これについてあらためて取上げる必要があるとは思われない。しかし実際にその衝に当たっている人々にとっては、教科書的事項のほかになお多くの問題が残されており、学会でも常に主要テーマの一つとして取上げられている。その意味では対麻痺のリハビリテーションは、最も古くしてしかも常に新しい問題であるということができる。

本誌はそこで、対麻痺のリハビリテーションについてそれぞれ第一線にあって苦心を重ねていられる諸先生にお願いし、現在の動向と将来の展望を含めて問題点を総ざらいしていただくことを目的として、本号を含む3号にわたる特集を企てたものである。

脊髄損傷患者の直面する問題としては、対麻痺に対する対策、褥創の予防および治療、尿路管理の問題、性機能障害の実態、理学療法および作業療法等医学およびパラメディカル諸問題があるほかに、患者の心理、職業、建築等の社会的リハビリテーションの問題が大きくクローズアップされている。医学的リハビリテーションが著しい成果を挙げていることに対し、社会の受入れ態勢という面での社会的リハビリテーションの遅れを今後如何にして解決してゆくかが残された大きな問題となるであろう。

三回の連続特集によって、片麻痺のリハビリテーションへのアプローチと現在および将来の問題点、その対策などが浮彫りされるものと期待している。

なお四肢麻痺については特殊の問題が多いので後に別の特集を企画したいと思っている。